

スペイン語文法教育再考

—英語教授法との比較（不定詞と過去分詞をめぐって）—

後藤 雄介

キーワード：英語、過去分詞、教授法、スペイン語、不定詞、文型、LOTE

【要 旨】 英語の文法知識を前提として教えられるLOTE（英語以外の外国語）、とりわけここではスペイン語について、英語の文法知識が具体的にどのように生かされているのか（生かされていないのか）を、「不定詞」・「過去分詞」に注目し、その教授法を比較することによって検討する。スペイン語の初級テキスト、およびスペイン語・英語の諸参考書を分析対象とする。

はじめに

英語以外の外国語（以下、LOTE [Languages Other Than English]）は、およそほとんどの学生・生徒にとって（日本人にとって、と言い換えてもいいだろう）、もし学ぶ機会があるならば英語に次いで学習することになる、いわゆる「第二外国語」¹としてある。つまり、私たち語学教師は、英語の知識を「大前提」としてLOTEの教育に従事していることになる。

このことは、LOTEの（とりわけ西欧系言語の）学習にとって決定的である。なぜなら、言語習得上に必要な基本的文法知識はおおむね英語で「学習済み」だからである。たとえばスペイン語を教えるにあたり、「前置詞とは何か」を一から説明する必要がなく、ser・estar動詞については「英語のbe動詞相当である」と説明するのみで、be動詞の何たるかについて解説するまでもないのは、まさに事前の英語学習のおかげである（想像するに、英語の知識を持たない者にスペイン語を教えることは、おそらく筆者には不可能だろう）²。このようにLOTE教育にとって重要な英語の文法知識であるが、私たちはそれをスペイン語教育の場面で、具体的にどのように活用しているのだろうか。

ご存じのとおり、英語はその国際的ニーズによって、日本の学校教育のなかで全面的に取り入れられ、高校・大学受験においても非常に重視されているため、その教育プログラムは大いに発展することになった。なかでも文法教育は、じつに精緻を極めていると言っていいだろう。翻って、スペイン語ほかLOTEは、その学習開始は大学入学後がほとんどで³、かつ選択的に学ばれることが多く、学習時間も機会も限定的である。だからこそ、私たちは英語ですでに獲得されている知識を生かすべきであり、かつ、英語の教授法を大いに参照すべきなのである。英語から多くを学ぶ過程で、ときにはLOTEの側から英語教育へと還元できることもあるにちがいない。

以上のような問題関心にに基づき、本稿は、第1節では「不定詞」を、第2節では「過去分詞」に注目し、スペイン語と英語における両者の教授法を比較検討するなかで、スペイン語教育として英語教育から取り入れるべき要素、およびスペイン語と英語の教授法にずれ・齟齬が見られる場合は整合性を持たせるために必要な方策を、それぞれ見出していきたい。

分析対象とするのは、早稲田大学教育学部のスペイン語初級クラスにおいて、近年使用実績のある5冊のテキスト（末尾の文献一覧にて、便宜上①～⑤の番号を付してある）⁴と、スペイン語・英語の諸参考書である。

1. 不定詞の呼称・用法をめぐって

(1) 英語における不定詞

まず、英語教育で不定詞がどう位置づけられているかを確認しておきたい。

筆者個人は、不定詞を「to + 動詞原形」と長らく認識してきた、との自覚がある。それはやはり、これまでに、とりわけ高校までに受けてきた英語教育の影響によるところが大きいのではないかと考え、試しに高校で使用していた英文法の教科書を確認してみた。そこには（意外にも）、「to-不定詞：to + 動詞原形」（松川 & Moore 1980：46）と記述されていた。つまり、「to + 動詞原形」と等しいのは「不定詞」ではなく、正確には「to-不定詞」とあった。しかし、もしそうであるならば、両者に共通のtoを取り除けば、論理的帰結として不定詞は動詞原形と同一であると解釈できることになってしまうのではないか。

このことについて、日本の英語参考書は、じつは少々混乱していると言えるだろう。不定詞は「〈to + 動詞の原形〉で表す」（山本監修 2006：129）と、筆者が理解してきたような形で説明しているものもあれば、「「to + 動詞の原形」を（to-）不定詞といいます」（沖原監修 2004：132）と、曖昧さを残した記述もある。

こうした混乱・曖昧さはしかし、専門的（というよりも、単に原則的）な立場から見ればきわめて単純に理解することができる。ここで不定詞と呼ばれているものも動詞原形と呼ばれているものも、どちらも英語原語ではinfinitiveなのである。『新英和中辞典』（第4版、研究社）のinfinitiveの項は、次のように端的に記述されている。

不定詞 《I can go./ I want to go.におけるgo, to go；toの付くものをto-～（to付き不定詞）、toの付かないものをbare[root]～（はだか [原形] 不定詞）という》……。[ここでの「～」は、辞書において見出し語（この場合はinfinitive）が入るとの意。筆者補足]

つまり、「論理的帰結として不定詞は動詞原形と同一である」というよりも、両者は「そもそも同一」であり、to-infinitiveにあたる「to-不定詞」という表現は妥当であるが、「to + 動詞原形」というときの「動詞原形」のほうが訳語としては不適切ということになる。動詞原形は、強いて言えばbare (root) infinitiveに相当するが⁵、それを訳するならばむしろ「原形不定詞」（松川 & Moore 1980：46）とすべきなのだろう。

しかし、以上が専門的（原則的）に「正しい」としても、教育現場の実感としてはやはり「びんとこない」と言わざるをえない。なぜならば、筆者の高校時代の教科書が典型的であるが、先の引用に続いて記述される「不定詞の用法」の項で説明されるのは、「原形不定詞」としての不定詞ではもちろんなく、「to-不定詞」に限定されての、それも英語学習者であればだれでも知っているであろう、あの3つの用法（名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法）である（松川 &

Moore 1980 : 46-47)。bare (root) infinitiveが不定詞でも、ましてや「原形不定詞」でもなく、(少なくとも日本語における英語教育においては)「動詞原形」とされる所以である。そして、この英語における3用法の強調が、スペイン語における不定詞の理解にどのような影響を与えるのか、それを次で論じることにする。

(2) スペイン語における不定詞

不定詞について、スペイン語の初級テキストはどのように説明しているのだろうか。5冊のテキストを例に見てみよう。

①には、目次に不定詞の見出しがあり、当該箇所において簡潔に、「不定詞（原形）」との記述がある（①：39-40）。②には、不定詞の見出しは目次にはなく、確認したかぎりでは、「tener que + 不定詞」を筆頭に重要動詞表現が紹介されている箇所が初出と思われるが（②：17）、不定詞自体についての解説は特にないようである。③にも、不定詞の見出しは目次には見出せない。そもそも同テキストは不定詞ではなく「（動詞の）原形」の語を採用している。たとえば、「動詞の原形には -ar, -er, -ir の3種類の語尾があります」、「vamos a + 原形「……しましょう」」、といった具合である（③：16）。④では、ふたたび目次に不定詞の見出しが見られ、当該箇所には、「単純不定詞（= 原形）は「～すること」、完了不定詞（= haber + 過去分詞）は「～したこと」という名詞的な働きをします」との説明が付されている（④：47）⁶。⑤ではまた、目次に不定詞の語は見あたらず、初出はおそらく、「動詞の不定詞（原形）は語尾 -ar, -er, -ir のいずれか」だと思われる（⑤：11）。

これらからわかるのは、英語における不定詞の説明との整合性が乏しいことである。①・⑤を見たごく一般的な英語の学習者は、英語での不定詞とは前置詞付きではなかったかと、疑問に思うはずである（③のような説明は、むしろ例外的である）。そして何よりも、スペイン語では英語のような不定詞の3用法の説明の仕方は、まずされない。むしろ④にあるように、不定詞の機能を名詞に「限定」する説明がなされるため、学習者はどうしても混乱を覚えるだろう。

(3) 不定詞の共通理解のために

一見整合性が見られないスペイン語と英語における不定詞であるが、両言語の専門的な参考書をみれば、それなりに説得的な説明に出会うことができる。

いまの英語の感覚からいえば、不定詞は「to + 原形」と感じられるが、もとは、この原形は動詞からできた名詞であって、toは動作や状態の方向・目的などを示す前置詞であった。……しかし、時代がたつうちにtoのもとの意味は忘れられて、原形が動詞として感じられた結果、toは不定詞のたんなる記号にすぎないようになってしまった。したがって、もとの不定詞といえば原形だけを指したものが、「to + 原形」が不定詞で、toの無い形をとくに原形不定詞（Root Infinitive）と呼ぶようにさえなった。……それゆえ、「to + 原形」の形の不定詞は、副詞句の働きからはじまったものであるが、toが記号化した結果、……名詞用法とか……形容詞用法が生じた。（西尾編 1981 : 419）

スペイン語の不定詞には英語のtoにあたるものはなく、そのままの形で使われます。英語のtoは〈方向〉「～へ」を示す前置詞なので、《to + 原形》が、〈方向〉と意味的に近い〈目的〉「～するために」の意味を示すときに使われたのが最初です。それがだんだんと一般化して、不定詞の印のようになりました。(上田 2011 : 237)

つまり、不定詞自体について言えば、両言語とも本来は動詞の無変化の形だけを指し、機能的には「名詞」であるとしている。そして英語では、toを伴った形が副詞的な意味を持つようになって「toが記号化」し、名詞的用法・形容詞的用法においても同じくtoを伴うようになったということである。

しかし、ここで気をつけなければならないのは、不定詞＝名詞であるということは品詞的に名詞だということであって、構文上の用法として、「名詞」に加えて「形容詞」・「副詞」の3用法があることとまったく矛盾しない。もう少し詳しく述べるなら、名詞的用法は「～すること」という訳において不定詞が名詞であることと完全に一致するが、形容詞的用法「～するための」と副詞的用法「～するために」についても、日本語としては不自然であるが、それぞれ本来は「～することのための」・「～することのために」であると理解すれば、不定詞自体は名詞であることについて納得がいく。

このことはまた、先にスペイン語のテキストの④で不定詞が名詞に限定されていたことの説明にもなっている。もちろんスペイン語にも、不定詞が品詞的に名詞であることは別に、構文上の用法として3つの用法は存在する。ただし、英語の不定詞の構文的用法が前置詞toで統一されるのに対して、スペイン語の場合は、名詞的用法（[例] Quiero **dormir.**）はそもそも前置詞を伴わず、形容詞的用法（[例] Necesito algo **que comer.**）、副詞的用法（[例] Vino **para verte.**）については前置詞が一樣ではないという問題がある⁷。

このように、不定詞自体の定義についても、いわゆる不定詞の3用法についても、英語とのがずれがあるため、スペイン語では不定詞を体系的に教えてきたとは言いがたい。たしかに、英語のようにすっきりと教えることは容易ではないが、これまでに見てきたような学習者に起こりうる誤解をあらかじめ回避するためにも、不定詞については英語に準じた教授法を採用することも検討するべきではないだろうか【表】⁸。

【表】

英語の不定詞			スペイン語の不定詞		
前置詞	品詞上の機能	構文上の用法	前置詞	品詞上の機能	構文上の用法
to	名詞	名詞	×	名詞	名詞
to	(名詞)	形容詞	para, que など	名詞	(形容詞)
to	(名詞)	副詞	a, para など	名詞	(副詞)

2. 過去分詞の性数変化をめぐって

(1) スペイン語における過去分詞

英語で過去分詞を使った構文としてすぐに思いつくのは、受動態（be + 過去分詞）であり、完了形（have + 過去分詞）である。スペイン語でも両者は英語と基本的に同じ構造であるため、他の構文（たとえば、再帰動詞、gustar型動詞など）に比べて導入は相対的に容易である。とはいえ、その導入は具体的にどのようなようになされているだろうか。5冊のテキストを例に見てみよう。

受動態（ser + 過去分詞）についての記述はすべてのテキストでほぼ共通で、過去分詞が主語に応じて「性数変化（一致）」することが記述されている（①：48、②：41、③：44、④：47、⑤：51）。そもそも英語には、とりわけ性変化の概念がないため、スペイン語の受動態において過去分詞が性数変化することは、必ず強調すべき事項である。

しかし、ここで留意しなければならないのは、すべての過去分詞が性数変化するわけではないことである。たとえば、（専門家にとっては火を見るより明らかなことであるが、）完了形（haber + 過去分詞）における過去分詞は性数変化しない。このことも5冊のテキストはすべて記述してはいるが（①：47、②：42、③：43、④：46、⑤：55）、受動態と完了形での過去分詞の扱いのちがいが強調されているのは、④のみであった。

過去分詞は動詞から作った形容詞です。形容詞なので、性・数の変化があります。……ただし、次に見るような完了形時制（「○○完了」という名前の時制）を作る過去分詞は性・数の変化をせず、-oで終わる形のみを使います。（④：46）

ただし、それでもなぜこのちがいが生じるのか、スペイン語初学者にとっては必ずしも自明ではないだろう。過去分詞は「形容詞なので、性・数の変化がある」ならば、受動態の過去分詞は形容詞で、完了形の過去分詞は形容詞ではない、と明示するべきではないだろうか。

こうした過去分詞の扱いのちがいを、たとえば文型の観点から説明することはできないだろうか。残念ながら、スペイン語における文型教育は、初級ではごく基本的なものに留まっている。ほとんどのテキストはその序盤で、いわゆる「第1文型」（S + V）に基づいた平叙文・否定文・疑問文の原則を説明したあとは、中盤で知覚動詞などごく限られた事例について若干触れる程度である。この程度の文型学習で済ませられるのは、とりもなおさず既習の英語のおかげである。その英語の文型学習から、過去分詞の構文上のちがいについてももっと学べることはないだろうか。

(2) 英語における文型分類と過去分詞

英語における文型学習は、じつに充実していると言うことができる。「第1文型」に始まり、「第2文型」（S + V + C）、「第3文型」（S + V + O）、「第4文型」（S + V + O + O）、そして「第5文型」（S + V + O + C）に至るまで、その分類・解析は、まさに「微に入り細を穿つ」と言うにふさわしいものである。

しかし意外なことに、それほど充実しているにもかかわらず、英語参考書で過去分詞を含む受

動態・完了形が文型で解析されている事例は、確認できた範囲ではあまり見当たらず、明示的なものはわずかに以下のような記述に留まった。

能動態を受動態に換える場合に、能動態の主語は前置詞byの目的語になって文末に移動し、代わって能動態の目的語が主語の位置にくる。動詞の部分は〈be + 過去分詞〉になる。(宮川ほか 1988 : 505)

この説明からわかることは、「動詞の部分は〈be + 過去分詞〉になる」とあるように、少なくとも英語においては、受動態部分は動詞にほかならないということである⁹。なるほど、英語においてはそれでよいのかもしれない。なぜなら、英語には性変化の概念がないため、スペイン語のように、受動態における過去分詞と完了形における過去分詞の差異について考える必要が、そもそもないからである。そのため、受験問題等で問われることもなく、文型的に解析することはその限りにおいて不要なのである。

では、結局のところ、スペイン語の受動態の過去分詞が性数変化することについては、文型による説明はできないのだろうか。

(3) 「教える」ための過去分詞理解

英語であれスペイン語であれ、不定詞と分詞（現在分詞、過去分詞）は、「いずれも人称を示さないという共通の特徴」ゆえに、総じて「動詞の非人称形」と呼ばれる¹⁰。そして、それぞれは機能的に、「不定詞は動詞性名詞であり、現在分詞は動詞性副詞であり、過去分詞は動詞性形容詞」とされている（西川 2010 : 229）。過去分詞については、ここでまたその「形容詞」性が強調されていると言える¹¹。

しかしその一方で、上記を指摘する同じ参考書のなかに、「それぞれ〔完了形と受動態——筆者補足〕の形において、haberとserは助動詞として機能している」との記述がある（西川 2010 : 239）。それはつまり、完了形においても受動態においても、haberとserがいずれも助動詞とみなされるのであるならば、過去分詞こそが紛れもなく「動詞」ということになる。性数変化の見られない完了形の過去分詞ならばいざ知らず、受動態の過去分詞は「形容詞」であり（ゆえに、性数変化する）、かつ「動詞」であるということは、学習者に対してどう理解させるのが一番合理的であろうか。

もし「教える」という観点を最重要に位置づけるならば、スペイン語については、以下の上田博人の説明がもっとも妥当に思える。

英語の受動態で使われる過去分詞とはちがって、スペイン語のserとestarの受動文の過去分詞は主語の性・数と一致します。これは、……《主語 + ser + 主語の補語》という構造になるためです。この補語は形容詞でも過去分詞でもかまいません。主語の補語なので主語と性・数が一致します。(上田 2011 : 250)

「動詞の態 *voz* とは、動詞の表す行為において動作の主体と動作の対象との間にどのような方向性があるかを示す動詞形態」（山田監修 1995：540）という、能動態・受動態のいずれにしてもそれを「動詞」ととらえる規範的文法理解に対して、上田は受動態の過去分詞を「補語」（C）と位置づけ、それゆえに性数変化することを明示している。

英語についても、たとえば、インターネット上で展開する英語学習サイト「理系のための英語学習法・博士塾英語！」¹²の示す教授法が注目に値する。同サイトは、「受動態はSVC文で理解する」と見出しに掲げ、英語においても（性数変化がないにもかかわらず）、受動態の過去分詞を補語としてとらえることを推奨している。「過去分詞（-ed）は、分詞であって、動詞ではない」とは少々書き過ぎのきらいがあるが、教育におけるプライオリティとはいったい何なのかということについて、考えさせる事例である。

むすびにかえて

本稿はここまで、「不定詞」・「過去分詞」を取り上げ、LOTEのひとつであるスペイン語の文法教育において、英語の文法知識をいかに生かすことができるかを検討してきた。

その結果わかったことは、英語の事前知識はもちろん重要ではあるが、スペイン語の文法教育とはずれ・齟齬がある場合があり、英語の教授法をそのまま取り入れれば済むわけではないという実態も見えてきた。不定詞については、英語における3用法をスペイン語に導入するにあたっては、品詞上の機能と構文上の役割とを区別する必要があることが明確になった。過去分詞では、スペイン語において受動態の過去分詞が性数変化することについて、英語の文型解析を応用してもなお、その理由付けには若干の困難さが残ることも浮き彫りになった。

スペイン語における英語文法知識の活用はもちろん、この二項目に留まるものではない。このほかにも、英語をもっと生かすべきスペイン語における文法説明はありうるだろう。その検討は今後の課題としたい。ただしその際も、英語の教授法をそのまま取り入れるのが最善とは限らないとの意識を持つことが大切であるということを、今回の検証は示唆している。

また、英語の文法知識の活用を必要としているのは、なにもスペイン語だけではないだろう。他のLOTEでも英語との教授法上の関連性があるはずで、スペイン語と英語との関係とはまた異なったものである可能性もあろう。英語教授法との関係におけるLOTE間の比較も、今後の重要な課題である。

【付記】本稿は2014年度早稲田大学教育総合研究所研究部会B-4「英語学習教材に学ぶ未習外国語教育法の改善——スペイン語を事例とした基礎研究」（研究代表者：後藤雄介）の研究成果の一部である。

注

- 1 「第二外国語」(通称、「二外(にがい)）」という表現は本来、価値中立的に「おもに英語に次いで学ぶ外国語」を意味するにすぎないはずであるが、どうしても「副次的・下位的」な意味合いを含意してしまうため、早稲田大学教育学部では「未習外国語」と呼び習わすようにしている(ものの、LOTEを専門的に学んでいる学科所属の学生のなかでさえ「二外」と称する者が多いというのが、残念ながら現実である)。
- 2 英語の知識はときにスペイン語学習の妨げになることもあるが(cf. 後藤 2009: 69-74)、役に立つことのほうが圧倒的に多いのは言うまでもない。
- 3 もっとも、高等学校におけるLOTEの学習も、徐々にではあるが増えつつある。後藤ほか 2010を参照されたい。
- 4 テキストの選定は、通年週2回の授業で文法事項を一通り習得することを到達目標としているため、接続法過去まですべてをカバーしていることを条件としている(なお、コミュニケーション能力習得のためには、ネイティブ講師による通年週1回の会話授業が別途平行して開講されている)。5冊のテキストはこの条件に合致し、学部のスペイン語教育の展開に大きく寄与してくれた。ここに記して感謝する。
- 5 別途、the base form of a verbという表現もある(『ジーニアス和英辞典』第3版、大修館書店)。こちらのほうがまさに「動詞原形」であろう。
- 6 完了不定詞も含めたこの説明は、学習者にはわかりにくいとの印象を与えるかもしれない。
- 7 このように、スペイン語でも不定詞は当然前置詞を取りうる。上田博人が「スペイン語の不定詞には英語のtoにあたるものではなく、そのままの形で使われ」と言う意味は、不定詞が前置詞と結びつかないということではなく、英語のように不定詞自体が前置詞を含んでいるとは考えない、ということであろう。
- 8 表中、()内は、それぞれの言語において教育時の強調比重が低いことを示す。
- 9 その他、受動態部分は動詞であると図表で了解できるものとして、松川& Moore 1980 (32)、西尾編 1981 (397)、RAE 2011 (221)を挙げることができる。
- 10 または、単に「不定形」と呼ばれる場合もある(山田監修 1995: 284)。
- 11 現在分詞についても、それが英語のような動名詞の用法はないこと(スペイン語で名詞とされるのは、現在分詞ではなくまさに不定詞である)、また形容詞として原則的に機能しないことなど、過去分詞同様、英語との差異化が必要とされているが、その検討はまた別の機会に譲りたい。
- 12 <http://re.hakase-jyuku.net/EnglishGrammar/progressive.html> (2014年9月30日最終確認)。

文献一覧(著者アルファベット順)

[スペイン語テキスト]

- ①藤野雅子、古家久世 2007.『スペイン語のエッセンス』弘学社
- ②福寛教隆 2008.『動く!スペイン語』朝日出版社
- ③平井うらら、ほか 2009.『大好きスペイン語——スペイン語講読のための文法』同学社
- ④木村琢也 2010.『スペイン語の基礎』朝日出版社
- ⑤栗林ゆき絵、ほか 2010.『エストレリター——スペイン語入門コース』朝日出版社

[その他の文献]

- 後藤雄介 2009.『語学の西北——スペイン語の窓から眺めた南米・日本文化模様』現代書館

- 後藤雄介、ほか 2010. 「高等学校におけるスペイン語教育の現状と展望」『早稲田教育評論』24巻1号、45-61頁
- 松川昇太郎、William L. Moore 1980. 『English Grammar: How to Master It (Revised Edition)』教育出版
- 宮川幸久、ほか 1988. 『ロイヤル英文法』旺文社
- 西川喬 2010. 『わかるスペイン語文法』同学社
- 西尾孝編 1981. 『実践英文法活用事典』日本英語教育協会
- 沖原勝昭監修 2004. 『ズーム総合英語』第一学習社
- RAE (Real Academia Española) 2011. *Nueva gramática básica de la lengua española*. México, D.F: Editorial Planeta Mexicana.
- 上田博人 2011. 『スペイン語文法ハンドブック』研究社
- 山田善郎監修 1995. 『中級スペイン文法』白水社
- 山本英一監修 2006. 『ブロード総合英語』啓林館